

〔翻 訳〕

バルバイとイブライム—ジュस्प・ママイの教師たち

アディル・ジュマトゥルディ
トガン・イサク 著
西脇隆夫 訳

訳者まえがき

本稿は、中国キルギス族の学者アディル・ジュマトゥルディ（阿地力・居瑪吐爾地）とトガン（トクトビュビュ）・イサク（托汗・依莎克）両氏による『居素普・瑪瑪依評伝』（内蒙古大学出版社 2002年）の第一章第4節「巴勒瓦依—居素普・瑪瑪依的啓蒙導師」（同書19～24頁）及び第二章第3節「朱素普阿洪・阿帕依和額布拉音・阿昆別克」（同書58～76頁）より訳出したものである。

この『居素普・瑪瑪依評伝』は、「現代のホメロス」とも称されている、中国キルギス族の大マナスチであるジュस्प・ママイ（1918～）の生涯とその作品について紹介している。なお、著者自身によるキルギス語版『《瑪納斯》演唱大師—居素普・瑪瑪依』（民族出版社 2007年）が出版されているので、訳出の際に参考にした。

ジュस्प・ママイの語った英雄叙事詩「マナス」については、これまで日本では以下の訳文によって紹介されている¹⁾。

1. 乾尋訳「克斯萊提との闘い—キルギス族英雄叙事詩（マナス）第四部（凱耐尼木）より」『月刊シルクロード』第7巻第1号 1981年1月号
2. 西脇隆夫「英雄叙事詩『マナス』の研究

(1)「島根大学法文学部文学科紀要」第15号-I 1991年

3. 西脇隆夫「英雄叙事詩『マナス』の研究 (2)」『島根大学法文学部文学科紀要』第17号-I 1992年

4. 西脇隆夫「英雄叙事詩『マナス』の研究 (3)」『島根大学法文学部文学科紀要』第21号 1994年

5. 西脇隆夫『キルギス族英雄叙事詩「マナス 瑪納斯」第一部』『中国少数民族文学』刊行委員会発行 2002年

著者たちの略歴については、次の訳文で紹介している。

1. 西脇隆夫訳『『マナス』の語り手ジュस्प・ママイ（上）』『名古屋学院大学論集』第36巻第1号 1999年
2. 西脇隆夫訳『『マナス』の語り手ジュस्प・ママイ（下）』『名古屋学院大学論集』第36巻第2号 2000年

ただし、訳文を発表してからすでに10年も経過しているため、アディル・ジュマトゥルディ氏は中国社会科学院民族文学研究所の研究員（教授）となり、トガン・イサク女史は中央民族大学カザフ語学科副教授になっている。なお、この訳文は著者たちによってまとめられた「評伝」のダイジェスト版（キルギス語）ともいべき文章を訳出したものである。

20世紀の初め、カクシャールの谷に住むキルギス族のあいだでは、英雄叙事詩「マナス」を吟唱するブームが起き、マナスチになることが多くの若者の目標になった^{2),3)}。このような文化的な雰囲気は将来にすぐれたマナスチが誕生するための有利な条件を作っていた。しかも、このブームの主流は、わが国の有名なマナスチのジュスパクン・アバイ（朱素普阿洪・阿帕依）、イブライム・アクンベク（額布拉克・阿昆别克）、バルバイ・ママイ（巴勒瓦依・瑪瑪依）及び当時わが国のカクシャール谷に避難していたソ連キルギスタンの大マナスチであるサゲムバイ・オロズバコフ（薩恩拜・奥諾孜巴克）などによって作られていた^{4),5)}。彼らによる叙事詩の吟唱と叙事詩の採集活動が、ジュスパ・ママイという、世界にその名が知られ尊敬されている「マナス」の語りの大家を作ったのである。あたかも鳥が羽で飛翔するという道理のように、もしも先輩のマナスチたちのすぐれた成果がなければ、特にバルバイの心をこめた育成がなければ、ジュスパ・ママイの今日の成果は想像し難いのである。

バルバイは、英雄叙事詩「マナス」八部の内容を吟唱し採集したことで、またこの貴重な遺産をジュスパ・ママイに伝授したことで人びとから注目され、人びとが記念し称賛するに値した人である。バルバイはわが国で最も早くに「マナス」を採集して記録し、書面（写本）のためにこの叙事詩を進んで保存することに努力を怠らなかつた民間文学者だと言うことができよう。彼の意義ある仕事は、建国後の60年代初めによく私たち民俗学者、民間文学者が継承したのである。バルバイは現代のキルギス族において有名なマナスチであり、「マナス」の採集者、社会運動家及び教育者であった。

バルバイ（1892-1938年）とジュスパ・マ

マイは実の兄弟であった。彼はママイ夫婦が生んだ27人の子どもの中で2番目の子であったが、生存していた子どもの中では一番年上であった。その伝奇的な生涯は人びとの興味を引かずにはいられない。その出生をめぐる面白いへん面白い話が伝わっている。バルバイの母ブルリが産み月になってまもなく出産しようとする時、コジャケルディという占い師が用事でママイ家にやって来た。当時、悪質な伝染病と喉の病気が流行していて、多くの命が病魔に奪われていた。占い師の突然の訪問にママイの母親カニムはひどく喜んだ。そこで、彼女は占い師に息子の嫁ブルリのために安産か、子どもと家の者が平安で健康か、流行病から逃れられるかななどを占ってもらうことにした。占い師は自分が占い用の石を持っていないと断ったが、カニム老夫人ががっかりし慌てているようすを見ると、その場で地面から石や羊の糞などの物を拾って、41個の占い用の石にしてブルリのために占ってやった。

ひとしきり占ってから、「奥さん、おたくの家では亡くなられる方はありません。あなたの嫁は健康な男の子を生むでしょう。この子の将来は短命でしょうが、事業を作り出し、前途のある子どもだろう。あなたはせいぜい晩に黒ヤギを屠殺して、肉を6人の隣人に分け与え、あなたたち自身はヤギの肉を食べてはいけません。明日、西の方の新居に引っ越しするのがよい。子どもはそこで生んで、他人の家で育てるのがよいだろう。子どもの名はバルバイと名づけなければいかん」と語った。

伝統的な信仰を固守するカニム老夫人は占い師の話を聞いてから、すぐさま使いを出して西の方の親戚ジャンティックに、自分の家を彼のところに移してしばらく住むために手伝うようにと知らせた。そのうえ、すぐに黒ヤギを屠殺し

て近所に分けた。あくる日、ママイ家は西の方の新しい牧畜地に移動した。こうして、バルバイは1892年にアクチ県カラブラク郷サズティク村の西側のところで生まれた。家の者は古い師のことばどおり子どもにバルバイと名づけた。当時の産婆はバルバイの叔母であり、ママレクの妻だった。バルバイが生まれてから7日後に、彼女は子どもを自分の家に連れて行き育てた。このようにして、幼いバルバイは叔父のママレクと父母の手元で育てられ、両家の共通の子どもになったのである。

彼が7、8歳の頃、父母は文字を習い経典を学ぶためにイスタムコジャというモルドーのもとに送られた⁶⁾。このモルドーのもとで、バルバイは4年のあいだ苦労して学び、イスラム教のさまざまな戒律や儀式を学び「コーラン」の初歩的な内容をつかんだ。その後、彼はキルギスタンから来たサルブベクというモルドーのもとでしばらく学び、文学、算術、歴史、地理などの方面に関する知識を理解した。これらの知識によってバルバイは大きな吸引力を身につけ、新しい世界が開かれることになった。この教師の授業を通して、バルバイは多くの文学の名著の内容、人類の歴史及びキルギスタンと中央アジアにおける新興の文化運動の状況を理解しただけでなく、新しい文化、新しい科学に対して初歩的な知識を得て、しかも豊富で多彩なキルギスの民間文学に対して特別の興味を生むようになった。

学習を通して知識を増し、視野を広げてから、周囲の人びとがふだん語っている民話、うたっている歌謡を意識的に注意して耳を傾けるようになった。しかし、これら細々とした民間文学は彼の強烈で精神的な要求を満足できず、彼はキルギス族が長期に口頭で保存してきた多くの長篇の英雄叙事詩、叙事詩を聞き、さまざまな

民族の各種の文学作品を読んで、内心の飢えをいやしたいと思った。

当時、交通が不便であったため、カクシャル谷は世間からほとんど隔絶されている山地であった。バルバイは外の世界を見たり、歩きまわることができるように、たまたまカクシャル谷に商売に来る商人たちと知り合い、彼らに贈り物をしたり招いたりして、彼らが次に来る時には書籍や新聞を持ってくるようにしばしば頼んだ。それからは、彼はアトシの商人バクティアホンを通してカシュガル、ソチャ、クチャなどの都市からかなりの書籍を集め、カシュガルの商人クセルバイを通してウズベキスタンのアンディジャン、タシケントで出版されている書籍や新聞を集めた。年齢を重ねるにつれて、バルバイは気がついた。周囲のキルギス人は外部の商人が食糧や各種の日用品を販売に来るのを受動的に待っているしかなかった。しかも、彼らは自分で主体的に商売をして生活を維持し、生活水準を高めることが分らなかった。そこで彼は商売をして、一方で当地の人びとに生活の便利さをもたらし、もう一方で商売の機会を借りて、外に出かけて歩きまわり、もっと多くの書籍を集めて読んで、自分の知識の水準を高めようとした。それからというもの、彼はラクダを引いて商売をする生活を始めた。彼の頭脳はすぐれていて、経営に巧みであったため、商売は絶えず拡大し、品数も増え、数年経たないうちに、当地でかなり名望のある豊かな商人となった。彼は外地でもさまざまな民族の友人と交わった。商売上のことで、何カ月も家にもどらず外地を歩きまわるとは、彼にとってよくあることと言われた。

バルバイをよく知っていた人びとや親戚の思い出によれば、バルバイは開放的な性格で、心根は善良、気前がよくて、喜んで人を助ける人

であった。彼は生活が貧しくて暮らしに困っている人をいつも援助していた。彼のもう一つきわだった性格は絶えず知識を求め、民謡、コムズの演奏及び叙事詩の吟唱に対して熱狂的な憧れを抱いていたことである⁷⁾。彼はいつも人びとの口からジュスパクン・アパイという大マナスチの名前を耳にすると、会ったことはなくても、自然に尊敬の念を生じることだった。後に、彼はこの大マナスチの弟子、ムムベトクト・サヤク、ムサンジャン・オノバイ、サディル・ムムメトなど歌や演奏をよくし、才能に富んだ若者たちと交わり、彼らといっしょに祝賀や婚礼の儀式の際に叙事詩を吟唱し、コムズを演奏し、その雰囲気は活発だった。

バルバイの青年時代は、ちょうどカクシャル地域の「マナス」の吟唱活動が広く流行し、大きな高まりが相次いで起きた時期だった。人びとは「マナス」の吟唱活動を通して精神的な喜びを得ていた。「マナスの英霊が依然としてこの世に生きている」と考え、英雄叙事詩「マナス」を吟唱する歌手をますます尊重していたのである。

バルバイは、「マナス」の完全な内容を吟唱し、採集し、記録して後代に伝えることがいかに重要であるか認識していた。そこで、彼はジュスパクン・アパイの吟唱する内容を学んで記録することが自分の神聖な使命だと見なし、機会を見つけては彼の吟唱にくり返し耳を傾け、その吟唱する内容を学んで暗唱して記憶した。最後に、自分は彼の吟唱した内容をすべて紙に記録して後代に伝えることを願っていると話した。彼がくり返し説得し、叙事詩を紙に記録すれば永遠に保存できるという重要性を指摘してから、ジュスパクンは彼に自分が知っている内容を始めから終わりまですべて吟唱することに同意したのである。

バルバイの記録の仕事は決して一路順風というわけではなく、さまざまな客観的な要素による妨害から、断続的に進めざるを得なかった。しかし、いつも活動している状態の時には、バルバイはジュスパクンの絶えない吟唱から何度も「マナス」の偉大さを感じ、同時にジュスパクンの吟唱の才能に感心して、限りない崇敬の念を生じた。彼はかつて当時いた他のマナスチたちが語るのを聞いたことがあるが、ジュスパクンに匹敵するようなマナスチはいなかった。このために彼は自分がしている記録の仕事にいっそう力を注ぎ、いっそう信念を持ち、さらに一步進めてその重要性を認識した。彼が記録する時、一種ふしぎな力によってこの使命を完成するように促されているみたいと感じた。しかし、彼はマナスチが休みなく連続して語ってもらうことにはあせらず、彼に緊張をゆるめさせ、語ることと休むことのつりあいをうまくとり、休みながら吟唱してもらった。語らない時には、「マナス」に関係するさまざまな問題を出して答えてもらった。たまたまジュスパクンと仲のよい人を招いては、メンヨウを屠殺してもてなし、ジュスパクンにみんなのために即興で「マナス」の内容を語ってもらって、その想像力を刺激し、自身の超人的な才能をいっそうよく発揮させて、内心の憂いを取り除かせた。このような吟唱がまたバルバイの記録の仕事に好ましい条件を作り出したのである。

バルバイは家人に助けられて、有名なマナスチとの協力のもとで、ついにジュスパクンの吟唱する叙事詩の前半三部「マナス」、「セメテイ」、「セイテク」の内容をすべて記録した。これは、当時の条件では想像できないことだった。しかし、いずれにしても、彼の仕事は、叙事詩「マナス」の発展史上における美談であ

り、人びとから称賛された。しかもこの行為から、私たちは見通しがきき、忍耐づよいバルバイの気力を見ることができるのである。

バルバイはこのすぐれたテキストを記録しただけでなく、長らくジュspbアクションのそばに付き添って、この傑出したマナスチの吟唱の技術、吟唱の特色を身につけ、したがって「マナス」吟唱の決まりに対してもかなり深く認識することができ、努力することによって自分もその当時では名の知られたマナスチとなっていた。当時、ジュspbアクションを師として仰ぎ、「マナス」を学んだ人は多かったが、その中で聴衆のあいだで一定の影響を生み、自身の吟唱によって人びとに称賛されたのはバルバイ・ママイ、マムベトクト、ムサンジャンなどであり、彼らはジュspbアクションの弟子として大きな成果を収めたと認められていた。

1916年、キルギスタン内で発生した戦乱によって多くのキルギス人が高山を越えて中国内のカクシャル地域に避難してきた。これら難民の中にサゲムバイ・オロズバコフというキルギス族の中で名望があり傑出したマナスチがいた。彼の到来は当時大きなニュースとなり、有名な「マナス」吟唱の競演活動の催しを促進することになった。ジュspbアクション・アパイはカクシャル谷で人びとがみなよく知っているマナスチであり、サゲムバイ・オロズバコフの名声も人びとがとくに熟知していた。二人の有名なマナスチの相遇は早くから「マナス」の内容に耳を傾けることに熱心で、英雄叙事詩に魅了されていたカクシャル地域の人びとにとって、千載一遇のチャンスだった。地元の有識者は二人のマナスチによる叙事詩吟唱の競演を行なうために、名望のある人を招いて判定してもらおう催しをすることにした。これは英雄叙事詩「マナス」の発展史上において中国とキルギス

タン両国のマナスチが面と向かって叙事詩を吟唱するという得難い競演になっただけでなく、「マナス」の広範な伝播と発展をきわめて大きく促進した。バルバイも聴衆の身分でこの二人の傑出した歌手の吟唱を自身の目で見たり自身の耳で聞いたりして、彼らの精彩のある吟唱に感服した。それからというもの、彼は「マナス」の完全な内容を採集し、一千年来マナスチの口頭で伝承されてきた叙事詩を後人に伝える決心を固めた。

まさしくこの吟唱会で、彼は叙事詩後半の五部の内容を吟唱できる有名なマナスチであるイブライム・アクンベクを見出した。イブライム・アクンベクの吟唱する内容を記録できるように、バルバイは生活面でも彼の世話をし、わざわざカラチからアトライチの自分の家に招き、各種の祝典や祭りの催しに連れて行って参加し、彼の目を広げて、よりよく吟唱できるようにした。イブライムの吟唱は4年にわたって断続的に行なわれた。彼は韻文と散文と結合した形式でバルバイに「マナス」の第4部「ケネニム」、第5部「セイト」、第6部「アシルバチャとベクバチャ」、第7部「ソムビレク」、第8部「チギテイ」など五部を語って、バルバイも彼の吟唱した内容をすべて逐字的に記録した。

バルバイはイブライム・アクンベクのテキストを記録する過程で、難民とともにキルギスタンから逃亡してきたもう一人の天才、有名なマナスチのティニベクの息子アクタン・ティニベクと知り合った⁸⁾。アクタン・ティニベクは年齢もバルバイとほとんど同じであり、父親の事業を受けついでいた優秀な叙事詩の歌手であり、同時にまた天才的な即興詩人でコムズの演奏家だった。このような民間文芸家と知り合いになることは、バルバイが求めても得られるこ

とではなかった。そこで、二人はたちまち親密な友人となり、連れ添って出かけ、各地を遊歴しながら婚礼の集まりに参加して、「マナス」やその他の民謡を吟唱し、集会を盛り上げて、人びとを楽しませた。これが当時の天才的な民間芸人たちの最もありふれた生活スタイルだった。

バルバイは商売をしながら、各地の「マナス」の語り手と交わり、「マナス」の吟唱技術を磨き、「マナス」を採集し記録するためにしばしば外地に出かけ、その足跡は新疆南部のカシュガル、ソチャ、クチャ、アクス、アトシなどの重要都市、はては国境を越えてキルギスタンのアトバシ、ナレンなどの土地にまで及んだ。彼はどの土地に行っても、他人の手中から各種の書籍と「マナス」の写本を購入し、もしも精彩ある叙事詩の断片を耳にすると、自らの手で記録をした。

バルバイは生涯で4人の妻を娶った。最初の妻は若くして亡くなり、後にキルギスの伝統的な古い婚姻形式にもとづき、叔父のケルバイの未亡人ムルザハンに妻にし、ムルザハンと付いてきた甥のジュマルを養い、その後ムルザハンは娘を一人生んだ。バルバイはキルギスタンへ行って商売をしている期間に、仲人の紹介で、アトバシ地域でカルドクという娘と相思相愛となり、最後に彼女を妻とした。カルドクはジェケブ、アメト、アスカルなど三人の息子を生んだ。彼女にはサルトバイという兄とコジャバイという弟がいて、いずれもキルギスタンのアトバシ地域に住んでいた。彼らはしばしば国境を越えてカルドクとバルバイに会いに来て、バルバイの求めによって彼のためにソ連で出版されたキルギス語、カザフ語、ウズベク語やトルコ語の書籍を集めてくれた。

バルバイの4番目の妻ズイナは戦乱でわが国境内に逃れてきたマムルハンという人の娘だっ

た。このマムルハンは現代のキルギスで有名な詩人モルドケレチの近親だった。モルドケレチが不公平な攻撃で捕らわれた時、迫害に巻き込まれるのを恐れて妻子を連れてわが国のカクシャール地域に逃れてきたのである。バルバイがズイナを妻に娶ってから、マムルハンは自分の珍藏するモルドケレチの多くの書籍を娘婿のバルバイに渡した。

こうして、バルバイの集めた書籍は日ましに多くなり、その内容も絶えず豊かになり、小さな個人図書館となった。彼は各国で出版されている書籍をたくさん集めたが、「マナス」の写本資料に対しては一刻もおろそかにしなかった。誰が吟唱する「マナス」であっても、彼は念入りに耳を傾けて記録した。誰であろうとその手に「マナス」の写本があれば、彼は高額でもかまわずに購入し、それから注意しながら記録し保存し、しばしば婚礼の祝典で人びとのために吟唱し、多くのマナスチの吟唱する内容を基礎にして自分の語りのヴァリエーションを作り出すためにたゆまぬ努力をした。

彼らのすぐれた口頭の創作技術を学び、自分が把握した内容を後輩に伝えるのが代々のキルギス族の民間芸人たちにおける優秀な伝統だった。バルバイもこのような伝統に背くことはなかった。彼は自分と同時代の最も有名なマナスチたちの吟唱する内容を学んで集めただけでなく、ジュスプ・ママイのような新しい世代の傑出したマナスチを育て、自分が把握していた叙事詩吟唱の技術をすべて弟に与えたのである。彼は全力を出し心をこめて指導し育成したため、ジュスプ・ママイはその才能を示し、当代マナスチの中で傑出した人物になったのである。

バルバイが集めて記録した「マナス」の資料には、主としてジュスプ・アクン・アパイの吟唱

した「マナス」前半三部「マナス」、「セメテイ」、「セイトク」の内容があり、イブライム・アクンベクの口頭から記録した「マナス」後半五部「ケネニム」、「セイト」、「アシルバチャとベクバチャ」、「ソムビレク」、「チギテイ」などの内容がある。これ以外に、ティニベクのテキストの中には「アルマンベトがケクチュを離れてマナスに身を寄せる」の断片の内容があり、サゲムバイ・オロズバコフの吟唱した内容及びその他のマナスチが吟唱した内容がある。つまり、今日私たちが目にするジュスプ・ママイの吟唱する23万2千行あまりの「マナス」八部はこれらの内容を集めてできたものである。

バルバイとジュスプ・ママイはそれぞれの才能によってこれら「マナス」の資料を取りまとめて整理する仕事を進めただけでなく、構造上、言語上も必要な加工と深化を行なった。彼らの苦労した仕事によって叙事詩は光を増し、芸術的にもいっそう非の打ちどころがなくなり、構造的にも整備され、「マナス」の吟唱史において空前絶後の偉大な壮挙となった。

バルバイは交際が巧みで、友人と広く交わり、視野の広い社会運動家であった。彼は若い時より積極的に各種の社会運動に参加し、特にキルギス族の文化的素養を高めること、彼らが新しい文化を学び、新しい知識を受け入れるよう導くこと、新式の教育を推進することに対して貢献した。1932年、彼は同じような理想を抱く人びとといっしょに「ウシ県キルギス文化促進会」を組織して、ウシ県、アクチ県のキルギス族農民、牧畜民の教育文化事業をおおいに促進した。彼らは牧畜地帯に学校を作り、文盲一掃の活動を催し、文字を読めない多くのキルギス族牧畜民が新しい科学、新しい知識を受け入れ、文字を知り読書できるようにした。1933年より、カクシャル地域だけで学校を4

か所も作り、バルバイは自分で故郷のメルケチに新式の学校を開いて教員になった。彼は自分で本から得た知識を人びとにさまざまな新しい知識、新しい文化を講義して、彼らの精神を啓蒙した。このために、彼は人びとから尊敬されて「バルバイ・モルドー」と呼ばれたのである。

ジュスプ・ママイの実の兄弟として、バルバイはジュスプ・ママイに対して父兄と教師という二役を担っていた。彼は生活の面で弟を育て慈しんでいただけでなく、ことばと自らの行ないの両方で教え導き、最後には弟をすぐれたマナスチに育てた。彼はジュスプ・ママイが「マナス」を語ることにありつた心の心血を注ぎ、遠大な志をすでに立てていることを目にする、1934年のある日、自分が長年心をこめて集めていた「マナス」の写本がしまった袋をすべてジュスプ・ママイに渡して、「これは私が長いあいだに集めた叙事詩「マナス」八部の完全な資料だ。これまで一冊ずつおまえに読ませたが、今日はすべてやるから、どうか心をこめて保存し、それらをすべて記憶して暗唱してくれ。ジャケブはこれらの資料に興味がないから、あいつに渡しても心配だ。あいつはこれらの資料が重要なことに気づかない。これらをおまえに渡せば安心だ」と、申しわたした。

バルバイの強い希望にジュスプ・ママイは重い荷を背負ったように感じられた。彼は兄バルバイの願いをよく理解し、これらの資料を自分の命のように尊いものと見なし、ますます読んでは記憶して暗唱しながら、自分の命のようにこれらの資料を保存し、すべての心血を注いで兄が完成できなかった仕事を完成しようとしたのである。

1937年、新疆の軍閥支配者である盛世才は自身の反動的な支配を強化するために、新疆省内の全体で諸民族の進歩的な人物と知識人を大

量に逮捕して虐殺した。バルバイもこの時に災難を逃れられず、盛世才政府に逮捕されてからカシュガルの監獄に送られ、その後は二度ともどることなく、獄中で生き埋めにされた。当時、バルバイはわずか45歳にすぎなかった⁹⁾。

バルバイは「マナス」を採集し、保存するためにその生涯をささげた。彼は英雄叙事詩「マナス」の価値を深く分かっていたために、さまざまな困難を克服し、最後には叙事詩八部の内容をすべて保存した。彼の仕事はキルギス文化史上で一大奇跡である。まさに彼の功績があったために、私たちは90年代に世の人が注目するわが国の「マナス」八部の完全な内容のテキストを目にすることができたのである。バルバイこそ、わが国における「マナス」の採集、整理、保存という一大事業の開拓者であると言えることができるだろう。その名前は永遠にわが国の「マナス」研究における歴史の記録にいつまでも載せられて残るであろう。

イブライム・アクンベク (1882-1959年)は、わが国キルギス族の傑出したマナスチの一人である。彼はアクチ県カラチ郷に生まれ、チュリク部落アクチュバク支族に属し、享年77歳で亡くなった。彼は早くに両親を失い、孤児として父親が残した数頭の羊を放牧しながらなんとか生活を維持していた。彼は感情を顔に表さず落ち着いていて、才能がありながらみせびらかさない人だった。彼は「マナス」数部の内容を吟唱できたけれども、内向的な性格のために多くの人が集まっている公開の場所で自分をひけらかさなかったため、長らく人びとから注目されなかった。つまり現在まで私たちは依然として彼がどのような人に師事したか、どのようにして「マナス」の語りができるようになったのか、彼の師弟関係は依然として解けない謎に

なっている。

イブライムは若い時にその名が四方に伝わり、四方から招かれて叙事詩を吟唱するようなマナスチではなかったため、彼の事績は謎のように知る人が少ない。私たちは、ジュस्प・ママイ老人とイブライムの子孫の口から彼の吟唱した内容がバルバイに記録され、ジュस्प・ママイに伝えられたという状況しか知ることはできない。

その当時、イブライムはバルバイのために散文の物語の形式で叙事詩「マナス」の第4部、第5部、第6部、第7部と第8部の内容を語り、ジュस्प・ママイはその兄が記録した内容にもとづき、その中の地名、人名、部落、民族と歴史的背景、物語の筋の基本を改めることなく、加工し潤色して韻文の形式に変えたのである。イブライムが語る叙事詩の内容は、ジュस्प・ママイの吟唱を通して芸術の高峰に向かって後代に伝えられることができた。

どんなにすぐれたマナスチでもその成熟以前には、彼が叙事詩の吟唱を学ぶ最初の段階では、第1に、長期にわたって人びとの口頭で伝えられていた叙事詩の物語の筋をすべて熟知し、叙事詩の中の複雑で錯綜している人物関係を整理しなければならず、また叙事詩の中の人名、地名、部落、馬の名称、武器の装備及び各種のテーマ、常套語、慣用的語句などを知り尽くしていなければならない。第2に、叙事詩の吟唱技術を把握し、その技術を自分の語りの中に溶けこませて人びとの前で余すところなく表現しなければならない。第3に、自分で学んだ叙事詩に心をこめて加工し、いっそう非の打ちどころないものにし、新しい光を輝かせ、新しいテキストあるいはヴァリエーションを創造することに巧みでなければならない。

もしも上述のような条件をそなえていなければ

ば、一人でみんなをリードし、世の中に名を揚げる大マナスチとなることはできない。叙事詩「マナス」は代々口頭の形式で伝えられてきた。キルギス族人民は始めから終わりまで口頭の形式でこのすぐれた叙事詩の遺産を吟唱し暗唱することを、その唯一の伝承形式と見なしてきた。イブライム・アクンベクの吟唱した内容はジュズプ・ママイのテキスト八部の重要な源泉であった。特に、叙事詩後半五部の内容はイブライムのテキストから直接に生まれてきたものである。だから、私たちがジュズプ・ママイの生涯とその吟唱する「マナス」後半の数部を研究する時、イブライム・アクンベクという名に注目しないわけにはいかないのである。

1917年初め、アクチ県カラチ郷において、サゲムバイ・オロズバコフとジュズプアホン・アバイという二人の有名なマナスチによる「マナス」吟唱の競演が行なわれた時、二人のマナスチは第1部の中の有名な「遠征」の一節をつぎつぎと吟唱してから、「マナス」第3部「セイテク」の後に第4部「ケナサロク」あるいは「ケネニム」という物語があることを述べたが、自分たちは吟唱したことがないと言った。

その有名な叙事詩吟唱の競演において、イブライムとバルバイは聴衆として傍らで彼らの吟唱を聞いていたが、その時イブライムはある招待客の付き添いの身分で参加していたのだ。彼は二人のマナスチが「マナス」の第3部以降の物語をあまりよく知らないと言うのを聞いた時、自分のそばで彼らの吟唱に耳を傾けていたバルバイにこっそりと言った。

「なあ、バルバイよ、おまえはわしの甥だから、おまえにだけ話そう。人びとはみんなあの人たちを大マナスチだと敬ってたくさんの人を集め、あちこちからわざわざ名士を招いて二人の吟唱を審判してもらった。だが、二人はセイ

テクの後にケネニムがいると言うだけで、それらの内容を語れない。これでも大マナスチだと言えるかね？ ケネニムの後に出現する英雄を、二人はまったく知らない。『マナス』は全部で八代の英雄の物語なのに、これらを二人はどうして知らんのかね？」

バルバイはこのことばを聞くと、ひどく興奮した。彼は至宝を手に入れたようにイブライムの秘密を知りたいと思って、「おじさん、そのことを知っているなら、みんなに語ってくださいよ」としきりに頼んだ。

イブライムはなにかをはばかりのように小声でバルバイに「こいつらの目の前では吟唱できない」と答えた。バルバイは一步進めて「じゃあ、私一人だけに語って、私に記録させてください」と催促した。イブライムは「後でおまえ一人にだけ語ってやろう」と答えた。そこで、バルバイはその叙事詩吟唱の競演が終わってから、さっそく準備を終えてイブライムに語ってもらうようたのんだ。彼はイブライムをカラチから自分の故郷カラブラク郷アトジャイロ牧場に招いて彼のために単独でテントを張ってイブライムの吟唱する内容を記録し始めた。

イブライムはかなりの内容を韻文の形式で吟唱し、かなりの部分を散文形式でバルバイに語った。彼が語るとおりに、バルバイは記録して、叙事詩の後半五部「ケネニム」、「セイト」、「アシルバチャとベクバチャ」、「ソムビレク」、「チギテイ」の内容をすべて記録した。これらの内容を記録する過程は何事も順調というわけではなく、さまざまな客観的な要素による影響を受けて、記録の仕事はときれとぎれに5年近くも続けられた。バルバイの頑張りや努力のもとで、とうとう無事に完成し、ジュズプ・ママイの記憶、暗唱、吟唱を通して伝えられることになった。

イブライムが「マナス」の語りをどのようにして学んだかという状況について、その娘ジュマハン（1995年に死去、享年82歳）はかつて筆者にこう語っている。

「父はいつも私たちに『マナス』の物語を吟唱したり語ったりしてくれました。いつも知人が来るたびに、父はお客の求めに応じて長時間叙事詩を吟唱しました。父はおとなしくて温厚な人でした。後に、父は私たちにバルバイとジュspbのため「マナス」を吟唱したようすを話してくれました。父の話では、祖父が父の17歳の時に亡くなりました。ある日、山で羊を放牧しながら、うつらうつら眠ってしまい、夢の中でマナス、バカイなどの英雄と会い、これら叙事詩の英雄たちが自ら叙事詩を父に教えてくれたのを見たそうです。その時、父はたいへん長いあいだ昏睡していました。それから、父は『マナス』を吟唱できるようになったそうです。私は、父がおよそもう60歳になった頃、家の者が暇で静かにしている時、いつも父を困んで叙事詩を吟唱するのを聞いていたことを覚えています。父は見知らぬ人には軽々しく吟唱しませんでした。父はマナスとその子孫の物語をすべて語ることができました。父が語っている時は全身を震わせ、その声ははっきりとしていて、それはすばらしいものでした。また、父の吟唱する内容の中ではカニケイ、アイチュレク、セメテイなどがカラコンガイ山に逃げ隠れたこと、カンチョロがセメテイを殺害して、キルギスに背いたこと、後にセメテイがこの世にもどり、アルマンベトがチェトベ山に葬られたことなどを覚えています。父の「マナス」を語る技術は私の弟カドラクンが受けつぎ、人びとのあいだで吟唱し、後にマナスチになりました。父は1959年に亡くなり、カドラクンも死にました」

イブライム・アクンベクの娘の話によれば、彼は「マナス」の後半五部を吟唱できただけでなく、そのうえ叙事詩の前半数部も吟唱できたことを知ることができる。なぜなら、前半数部の内容は広く伝承され、いかなる大マナスチもよく知っているからである。

イブライムがどのような道を通して「マナス」を学んだのか、先輩の大マナスチの誰に師事したのかなどの疑問に対して、私たちは明らかにできるような十分な資料はまだない。ただし、彼はあるマナスチの遺産を受けつぎ、はっきりした成長の過程があることは疑いもない。生前の彼は話すことや、人と交わるのも巧みでなく、しかも人びとの面前で叙事詩を吟唱することも少なかったため、多くの人が彼の成長過程をよく知らなかったし、その当時でも人びとに重視されることはなかった。バルバイ、ユサインアジやジュspb・ママイなど、「マナス」の資料の採集に熱心で、「マナス」に関する問題の探究に巧みな少数の学者だけが、「マナス」を完全に吟唱できる彼の状況について理解していたのである。

イブライムは傑出したマナスチであるだけでなく、キルギスの民俗や部落史（サンジラ）を熟知していた秀な民間文学の吟唱者、語り手であった。この点は、バルバイ、ユサインアジとジュspb・ママイなどの人の話からはっきりと理解できる。というのは、直接的に、あるいは間接的に彼の吟唱の内容を継承した人はいずれもキルギス族の中で才能のあふれた民間文学者だったからである。例えば、バルバイはマナスチであるだけでなく、有名な「マナス」採集者であった。イブライムの息子カドラクンは才能のあったマナスチで民間文学者であった。彼の吟唱した叙事詩の内容はかつて「マナス」工作组によって60年代初めに記録されていた。彼

が語ったすぐれた民話は大量に漢語など兄弟民族の言語に翻訳されて、新疆民間文芸家協会から表彰された。つまり、イブライムが語った「マナス」やその他の民間文学作品は、その息子カドラクンに直接に・伝えられて保存されたのである。60年代初期に、「マナス」の採集者がカドラクンに会った時、「自分の叙事詩の吟唱と民話の語りの技術は父から教わったものだ」と彼自身が採集者にはっきりと告げている。

バルバイとジュズプ・ママイ兄弟はイブライムの口頭から記録した資料に対して必要な加工、修飾と潤色を行なって、いっそう完璧なものにし、最後にジュズプ・ママイが語った「マナス」八部の中で後半数部の主要な内容になった。ジュズプ・ママイは始めから終わりまでイブライムを自分の最も主要な導師の一人と見なし、自分が吟唱した「マナス」の後半五部の内容は主としてイブライムの吟唱した内容を基礎にして加工と整理をしてできたものであると明確に話している。だから、私たちは、ジュズプ・ママイの吟唱する叙事詩、特に「ケネニム」以後の内容を通して、イブライムの傑出した才能を間接的にうかがうことができるのである。

古来より、「マナス」の吟唱活動はどうしても時間と環境の制限を受けないわけにはいかなかった。どのようなマナスチもみなある固定した時間内で持続して叙事詩の内容をすべて語り終えることはできないし、聴衆の求めに応じて叙事詩のある特定の内容を吟唱するしかない。それら「マナス」を学ぶ人は一段一章ごとに暗唱するしかなく、ある有名な段落や章節から始めて記憶し、それから異なる一段をつないで、断片から全体に及ぶように、最後には叙事詩の全部をつなげてまとめたものにする。だから、キルギス族の中で叙事詩の有名な一節を吟唱できる人はたいへん多いが、数部あるいは完全な

内容を吟唱できる者はかなり少ない。数部あるいは完全な内容を吟唱できるのは、才能の抜きん出た少数の芸人たちだけであり、叙事詩第4部「ケネニム」以降の内容を語れるのは、いっそう珍しいことなのである。イブライムが吟唱した叙事詩後半五部の内容はバルバイが記録してジュズプ・ママイが暗唱してから吟唱し、これが「マナス」が完全に伝えることのできた確実な基礎となっている。これこそがバルバイとジュズプ・ママイが叙事詩の流伝と保存のために行なった偉大な貢献なのである。「マナス」の吟唱史上で、最初に後半五部の内容を吟唱できたマナスチが誰なのか、私たちにはまだ的確に指摘できない。このため、イブライムがジュズプ・ママイに伝えた資料は明らかにきわめて貴重なものになっている。

訳 注

- 1) ジュズプ・ママイの語った「マナス」八部の主なあらすじは、以下のとおりである。

第1部 マナス 瑪納斯 Manas

マナスが生まれる前、カルマク人は古い師からキルギス人の中にまもなくマナスという英雄が生まれてカルマク人の支配をひっくり返すだろうと知る。カルマクの可汗アローケは、あらゆるキルギス人の妊婦の腹を割くように命じる。マナスの父ジャケブと母のチイルディは四方に避難する。チイルディはつわりのため虎の心臓、神鳥アルプの眼、ライオンの舌を食べたがり、キルギス人はその望みをかなえてやる。マナスは生まれた時、片手に血を握り、片手に油を握っていた。彼は森林に送られて育ち、後にトルファンで農作業をする。ジャケブは麦とアククラという痩せた馬を交換する。マナスは11歳の時にこの馬に乗り一族の者を率いて侵略者を追い払う。マナスは戦いで負かした可汗の娘を二人とも妻に娶り、後にカニケイを妻にして彼

女を妃にする。カザフ人のココトイ逝去一周年の時、その子ボクムレンが盛大な祭りを催し、マナスは招かれて祭りを主宰し、乱暴をはたらいたカルマク人の企みを破る。マナスは内外14人の可汗を統率する大可汗に推戴される。カルマク人が絶えずキルギス人の集居地に侵入するため、マナスは40人の勇士と堂々たる大軍を率いて遠征し、最後に大きな勝利を得て、汗の位につく。しかし、彼は遠征前に言われたカニケイの忠告を忘れ、うかれて帰国しなかった。その結果、カルマクの首領コングルバイに毒の斧で首の後ろを切られて、故郷にもどるとすぐに死んでしまう。カニケイは陵墓を作り、マナスの遺体をカラスー河の底に埋葬する。

第2部 セメテイ 賽麦台 Semetey

マナスの葬式が終わるやいなや家族内での争いが起き、マナスの異母兄弟アヴィケとコベンはマナスの子セメテイを揺りかごの中で殺そうと企む。セメテイの母カニケイは知恵を働かして暗殺を逃れ、息子連れてブハラの実家にもどる。セメテイは12歳の時に自分の身の上を知って故郷にもどり、バカイ老人に助けられて裏切り者を取り除く。チンコジャとトルトイが結託してアクンハンの城を包囲し、セメテイの婚約者の仙女アイチュレクを強奪しようとした。アイチュレクは白鳥に姿を変えてセメテイを探し、セメテイは敵を打破してアイチュレクと結婚する。コングルバイは再びキルギス人を急襲しセメテイは城で包囲されるが、グリチョロとアイチュレクがセメテイを救出し、敵の首領をたくさん殺す。その後、セメテイの腹心カンチョロが背き、トルトイの子クヤズと結託してセメテイを騙してマナスの墓の前に誘き出す。セメテイの乗馬、軍服、武器がカンチョロにだまし取られ、このためにセメテイは敵に勝てるすべを失い、最後に、戦闘中に急に消えてしまう。カンチョロとクヤズは勢いを得て、セメテイの忠実な勇士グリチョロの肩甲骨を裂いて奴隷にする。クヤズは身ごもっていたセメテイの妻アイチュレクを無理やり妻にする。

第3部 セイテク 賽依鉄克 Seytek

アイチュレクはクヤズの奴隷にされ、疑われないために魔術を使ってセメテイの子を体内に保存して、3年のあいだ身ごもってから生む。その後、さまざまな方法でクヤズとわたりあい、セイテクが成人になるまで育てる。セイテクはグリチョロたちの援助で苦戦しながらクヤズを殺して故郷にもどる。可汗の位を奪ったカンチョロを殺して父のかたきを討ち、人びとはまた幸せな暮らしを送る。カニケイはずっと自分の息子セメテイの死を信じようとせず、老英雄コショイの馬が競馬で勝てばセメテイがこの世にいるものと予想する。そこで、ある祭りの競馬にこの老馬を参加させ、老馬は優勝する。後に、カラドーはセメテイがカイカブ山の仙女とともに出沒することに気がつき、グリチョロ、バカイ、カニケイ、アイチュレクに知らせる。そこで、彼らはセメテイを見つけ、その精神と知恵を回復させてこの世にもどす。セイテクはカイカブ山の戦いにおいて仙女クヤルの助けで敵に勝ち、マナス一族の勢力を回復する。最後にセイテクは彼女と結婚する。

第4部 ケネニム 凱耐尼木 Kenenim

英雄ケネニムは父の事業を引きつぎ、キルギスの諸部落を強め近隣の他民族との関係を改善する。多くの勇士の補佐されてキルギス人の地域に侵略して騒がす妖魔との闘いを続け、妖魔の拠点を撃破して、キルギス人の諸部落は邪悪なものから逃れる。ケネニムはキルギス人の平和を守るため、戦闘中に一身をささげる。

第5部 セイト 賽依特 Seyit

セイトは幼い頃から敵を殺すため父に従って出征し、9歳から故郷を守る重責を担っていた。彼は巨人カラドーを征服し、奴隷にされていた人びとを解放し、スレマト可汗の娘と愛し合う仲になる。しかし、スレマト可汗はセイトに多くの過酷な要求を出す。愛する人の助けで、セイトはさまざまな難題を解決する。婚礼の際の競争では、競馬、馬上の闘い、弓矢の競争で一番となり、最後に愛する人と夫婦となる。帰郷の途中で、岳父が遣わした7人の巨人と7匹の

魔女に襲われるが、彼はつきつぎと負かしてしまふ。最後に、父ケネニムの阻止を聞かず、無理やり遠征し、先祖伝来の銃が暴発して死亡する。

第6部 アシルバチャーベクバチャ アス勒巴恰一别克巴恰 Asilbača-Bekbača

セイトは双子の息子アシルバチャとベクバチャを残す。アシルバチャは25死の時に戦場で犠牲となる。ベクバチャは人びとを率いてマドル、カドル及び八つ頭の妖怪の仲間アインジャルなど侵略者と不撓不屈の戦いを展開する。これらの敵を追撃して、その足跡は中央アジア、アフガン、チベットに及び、最後に老年まで人びとのため害を除き、故郷の平和を保った。

第7部 ソムビレク 索木碧莱克 Sombilek

ソムビレクはベクバチャの子で、幼い時に孤児となる。おじに育てられ、15歳の時に自分の身の上と祖先の業績を知る。故郷にもどってから、カルマク人、タングート人、マングート人などの侵略者と闘い、戦闘のたびに勝ってその非凡で英雄的な才能を示した。彼は自分が助けたトルコメンの娘ティニムハンを好きになり、夫婦となる。その後、しばしばマングート人の侵入を退け、重傷を負って、敵の不意打ちをくらって犠牲となる。

第8部 チギテイ 奇格台 Čigitey

チギテイはソムビレクの遺児であり、マドリクに育てられて成人になる。マドリクの心をこめた養成で、チギテイは武芸に精通し、群を抜いた力持ちの勇士となる。カザフ人がマングート人に侵略されたという知らせを聞いて出征し、マングート人と激しく闘い敵を退ける。敗将オートルはカラ・キタイ人と結託して、大軍を率いて再起をはかり、再びカザフ汗の位を奪う。チギテイは再び出征し強敵に勝つ。チギテイは妻を娶ることがなく、子がなかった。最後に重病を患い、苦しんで死ぬ。マナス一族の戦いの生涯はここで幕を閉じる。

2) カクシャル 東は現在の新疆ウイグル自治区

ウシ県ヤマンス郷から、南はスバシから始まり、北はキルギスタンのイシク湖の区域まで、すなわち現在のアクチ県境を含んでいる。(評伝8～9頁参照)

- 3) マナスチ キルギス語で英雄叙事詩「マナス」の語り手をいう。
- 4) ジュズプアクン・アパイ (?-1920) 中国アクチ県に生まれる。大マナスチのティニベク・ジャピに学ぶ。
- 5) サゲムバイ・オロズバコフ (1867-1930) キルギスタンの有名なマナスチ。「マナス」の前半三部を語ることができたが、第1部だけが記録されて出版された。その内容は次の日本語訳によって知ることができる。
 1. 若松寛訳『マナス 少年編』平凡社 東洋文庫 2001年
 2. 若松寛訳『マナス 青年編』平凡社 東洋文庫 2003年
 3. 若松寛訳『マナス 荘年編』平凡社 東洋文庫 2005年
 労作であるが、いずれも散文体で訳されている。
- 6) モルドー ウイグル語のモッラーと同じ。イスラム教で学問のある人を指し、児童に読み書きやコーランを教える人を指す。
- 7) コムズ 三弦の楽器。
- 8) ティニベク・ジャピ (1846-1902) キルギスタンのイシク湖付近で生まれた。現代のマナスチの中で最も傑出していた代表的な人物とされている。ジュズプアクン・アパイ、サゲムバイ・オロズバコフなど当時のマナスチが師と仰いだが、そのテキストは「セメテイ」の一部が出版されているにすぎない。
- 9) 盛世才 (1897-1970) 遼寧省開原の人。青年時代に日本に留学。1932年、新疆省長の金樹仁によって参謀長に任じられ、33年、新疆边防督辦となる。1941年、国民党から新疆省主席に任じられたが、44年に重慶に赴き、1949年に台湾に行った。